

イスラーム地域のユダヤ教徒

—カイロとイスタンブルの場合—

鴨志田聡子

satoko.kamoshida@gmail.com

キーワード： ユダヤ イスラーム地域 ユダヤ・スペイン語 ラディノ語 ジュデズモ
トルコ エジプト セファルディ 集团的記憶

要旨

本稿では、執筆者がカイロ（エジプト）とイスタンブル（トルコ）において2017年8月に実施したユダヤ教徒とその言語についての調査の概要を示し、それぞれの地域のユダヤ教徒の活動の特徴と今後の調査の可能性について考察する。ユダヤ教徒はカイロには全部で6人、イスタンブルには1万5千人から1万8千人ほど住んでいる。イスタンブルにはユダヤ・スペイン語（通称ラディノ語）の話者が現在でも一定数住んでいると確認でき、今後の調査の可能性が広がった。

1. 本調査の概要

1.1 調査の目的

執筆者は、ユダヤ教徒の言語の多様性について研究している。イスラーム地域に住むユダヤ教徒の独自言語と彼らが共有する過去についての認識「集团的記憶」について現地と直接会って聞き取り調査を重ねながら、ユダヤ教徒の言語共同体の現状について明らかにすることを目指している。執筆者は本調査に至る前は、東欧出身のユダヤ教徒が彼らの独自言語イデ

¹ 一般的に“Jew”「ユダヤ人」と呼ぶ。ユダヤ教では一般的に、ユダヤ人の母親から生まれた人とユダヤ教に改宗した人をユダヤ人とする。広い意味で自分をユダヤ人だと認識している人もユダヤ人とされる。「ユダヤ教徒」と呼ぶよりも「ユダヤ人」と呼ぶ方が一般的であるし、英語の“Jew”の意味に近いと考えられる。ただし、本稿においては「ユダヤ教徒」を調査の対象とした。なぜかという、今回の調査地においては「ユダヤ教徒」という用語を使う方が、現地の複雑な状況をよりシンプルに記せると執筆者が考えたからである。エジプトでは、母親がユダヤ教徒で、父親がムスリムの場合、生まれた子どもはムスリムになるという。現地のユダヤ教徒は、このようにしてムスリムとして生まれた子どもをユダヤ教徒の人数に含めていなかった。ユダヤ教徒の母親から生まれたムスリムの中には、ユダヤ教徒の文化的な活動に積極的に参加している人たちもいた。やや状況が複雑なので今回は「ユダヤ教徒」に調査対象を絞ることにした。

² Bunis (2016) は学術的にはジュデズモと呼ぶべきだとしている。ティノコ (2014) によれば、イスタンブルのユダヤ教徒は単に「スペイン語」と呼んでいるらしい。アメリカの話者の間では「ラディノ」という呼び方が一般的なようだ。本稿ではひとまず「ユダヤ・スペイン語」と呼ぶことにする。執筆者が現地調査で「ラディノ」と言うと、彼らが「ユダヤ・スペイン語」と言いなおすことがあったからだ。話者たちが「私たちのスペイン語」と呼んでいたという報告もある（三村友美 2017.10, 私信）。このような状況から、この言語の呼称は英語においても日本語においても定まらない。上田 (1992) は「ジュデズモ」、上田 (1998) は「ユダヤ・スペイン語」をタイトルにし、他の用語にも触れている。このように呼び名もまだ定まらない言語ではあるが、日本でも上田 (1992, 1998)、Orgun, G. & Tinoco, A. R. の語彙調査が報告されている。イスタンブル現地では三村友美氏や吉田浩美氏が調査した。また長塚竜生氏が文献調査を進めている。

イッシュ語を主軸に形成する言語共同体について調査した。現地調査は、東欧、米国、イスラエル国（以下、イスラエル）で行った。執筆者はイディッシュ語の調査を行った期間に特にイスラエルにおいてイスラーム地域出身のユダヤ教徒と直接会って話したり、ヘブライ語のメディアや書籍を通じて彼らについて知ったりした。イスラーム地域出身のユダヤ教徒の言語の一つユダヤ・スペイン語についても、東欧出身のユダヤ教徒が話題にしているのをしばしば聞いた。ユダヤ・スペイン語の先行研究はイディッシュ語のそれと比較して少なかった。こういった背景から執筆者は、直接彼らに会って話を聞いてみようと考えた。

1.2 調査の期間と調査地

調査はカイロでは2017年8月7日から15日、イスタンブルでは8月16日から25日に行った。今回の調査地にカイロとイスタンブルを選定したのは、これらの都市であればユダヤ教徒について現地調査できると執筆者が判断したためである。



図 1 調査地のイスタンブルとカイロ
(Google maps (2017) の一部を執筆者が編集)

1.3 現地調査について

調査では現地に住んでいるユダヤ教徒の他に、非ユダヤ教徒の人文系の研究者に直接会って現地のユダヤ教徒の状況について聞き取りをした。カイロで合計10人、イスタンブルで合計12人に会った。聞き取り調査の時間は1人につき1時間から3時間ほどであった。聞き取り調査の際は、基本的に相手が指定した場所で会い、主に英語で話した。比較的静かな場所で聞き取りができ、かつ、相手の承諾が得られた場合は ICレコーダーを使って録音した。

調査の際執筆者は、現地の研究者を通じてユダヤ教徒やユダヤ教徒に詳しい人を紹介してもらった。そしてあらかじめ彼らに自己紹介をし、聞き取り調査のために会って欲しくないかとお願ひした。現地に行く前に日本から連絡する際には、主にメールや電話を使った。現地ではメールや電話の他、Facebook や WhatsApp などのソーシャルメディアやメッセージャーを使用した。ソーシャルメディアを使うことで、現地の人たちの考え方や生活の様子をある程度知ることができた。現地調査後もつながりが維持でき、現在のところ非常に有効な方法だと考えている。

執筆者が現地での聞き取り調査の前に、協力者たちに調査の目的について説明すると、彼らは執筆者がイディッシュ語の調査の後でイスラーム地域の調査を始めた理由や、現地でこれまで誰に会ったかなどを詳しく尋ねてきた。そして、執筆者の宿泊先や滞在期間を確認すると、「ではこの人に会ってごらん」と言って自分たちの知人を紹介してくれた。執筆者はこれを繰

³ 本稿の2.3節と3.4節でそれぞれ述べるように、例外的にヘブライ語とイディッシュ語でも行った。

り返し、いろいろな人に会って話を聞くことができた。現地に滞在しているうちに、執筆者の存在がユダヤ教徒やその関係者にだんだんと把握されるようになった。執筆者も誰と誰のつながりが強いのか知ることができたし、調査上の課題について相談できる協力者にも会うことができるようになり徐々に調査が進めやすくなった。協力者の中には執筆者に将来の現地調査のための助言をしてくれた人たちもいた。調査者が実際に現地に行き、調査協力者に研究の目的や進捗をていねいに説明することで、より多くの協力を得ることが期待でき、研究の可能性が広がることが確認できた。

2. カイロ

2.1 カイロのユダヤ教徒について

カイロにおけるユダヤ教徒の歴史は長く、すでに8世紀にはカライ派という宗派の人々の存在が確認されている。15世紀からスペインからセファルディ系のユダヤ教徒が、19世紀から20世紀にかけてオスマン帝国と周辺国から主にセファルディ系のユダヤ教徒が、19世紀から20世紀にかけてアシュケナジー系のユダヤ教徒が東ヨーロッパからエジプトにやってきた (Beinin 1998, Kramer 1989)。第二次世界大戦前は少なくとも8万人のユダヤ教徒がいた (Nicolas 2017)。1947年まではエジプト全体で約6万6千人、そのうちカイロに4万2千人のユダヤ教徒が住んでいたのだが、ユダヤ教徒の多くはイスラエルの建国、パレスチナ問題、中東戦争による居心地の悪化、そしてエジプト国内の政変の影響を受けて欧米やイスラエルなどに移住した。1948年の第一次中東戦争の後、5万人から5万5千人ほどのユダヤ教徒がエジプトに残っていたが、1956年に第二次中東戦争が起きると1957年に4万人から5万人のユダヤ教徒が国外に移住した。さらに1967年に第三次中東戦争が起ると2千500人から3千人のユダヤ教徒が移住した。そして1989年にはエジプトのユダヤ教徒は300人から400人しか残っていなかった (Kramer 1989)。こうしてユダヤ教徒たちはエジプトから段階的に減少していった。国外への移住だけではなく、ムスリムとの結婚などを機にした改宗によっても、ユダヤ教徒の人口は減少しているようだ。

ユダヤ教徒がごくわずかとなった中、2013年に非ユダヤ教徒でエジプト人の映画監督 Amir Ramses 氏がアラビア語とフランス語の映画『エジプトのユダヤ教徒』を発表した。これはエジプトのユダヤ教徒を題材とした映画なのだが、エジプト国内でも公開された。エジプトのユダヤ教徒についてのテレビで報道されたこともあり、ある程度はマイノリティとして存在が知られている。現在のエジプトのユダヤ教徒については、カイロ在住の医師で医学研究をしている Mohamed Abou El-Gahr 氏が詳しい。彼はエジプトのマイノリティの研究もしており『エジプトのユダヤ教徒：繁栄から離散へ』(2006) というアラビア語の著作がある。

2017年現在、ユダヤ教徒の人口はエジプト全体で18人である (Parisse 2017)。地元のユダヤ教徒によれば、そのうち6人がカイロに、残りの12人がアレクサンドリアという都市に住んでいる。

⁴ Sephardim

⁵ عن يهود مصر (英語のタイトルは *Jews of Egypt*)

⁶ يهود مصر: من الازدهار إلى الشتات

執筆者はカイロのユダヤ・コミュニティのリーダーで、最年少のユダヤ教徒 Magda Haroun 氏（以下、マグダ）に直接会って聞き取り調査をすることができた。彼女に他のユダヤ教徒たちにも会えないかと聞いてみたのだが、彼女の母親をはじめとした他のユダヤ教徒たちは非常に高齢者なため、会って話をするのは難しいということだった。

2.2 カイロでの現地調査

執筆者はカイロでは1.3節の冒頭で述べたように10人に話を聞いた。そのうち、ユダヤ教徒はマグダ1人だけであった。マグダの活動を支える3人の人物にも話を聞いた。その他6人は現地の研究者である。

ところで執筆者は現地の研究者や現地に詳しい日本人の助言を受けて、カイロでは調査に協力してくれた研究者たち以外の非ユダヤ教徒と話す時にユダヤ教徒のことをなるべく口にしないようにした。「ユダヤ」や「イスラエル」などと口にすると、相手がさりげなく立ち去ってしまった。一般の人とはほとんどユダヤ教徒について話せなかったのだが、一方で、研究者とは興味関心を共有し、比較的活発に意見交換することができた。研究者に会うことで、ユダヤ教徒に関係する人々や資料などを紹介してもらうことができた。ユダヤ系の組織としては、2つのシナゴークとユダヤ・コミュニティの事務所を訪問した。

執筆者は現地での調査を続けているうちに、2.1節で述べたカイロのユダヤ・コミュニティのリーダーでセファルディ系のユダヤ教徒のマグダという女性と面会できることになった。彼女が指定した場所を訪ねて行くと、マグダの他にエジプトのユダヤ・コミュニティを中心としたNPO「ドロップ・オブ・ミルク・エジプト」のメンバーが2人いた。イギリスの雑誌記者⁸もやってきて、執筆者と一緒にマグダにインタビューした。

2014年、マグダはカイロのユダヤ・コミュニティの満場一致でリーダーに選ばれたという。それまで彼女はユダヤ教には全く無関心だったが、リーダーに選ばれてから、エジプトのユダヤ教徒の文化財を残さなければならないと感じるようになったという。彼女は自分の仕事のかたわら、自分の母親も含めたユダヤ教徒の高齢者のための介護施設、ユダヤ教徒ではないがユダヤ教徒の子として生まれた人のための教育機関、そしてシナゴークなどの管理をしている。カイロにあるシナゴークのうち、ベン・エズラ・シナゴークは観光客向けに公開されている。



図2 マグダ・ハロウン
シャアル・ハシャマイム・シナゴークの中庭にて執筆者撮影。マグダの後ろにいる人物はシナゴーク敷地内を警備しているムスリム。シナゴークの外側は軍と警察が警備しており写真撮影できなかった。

⁷ Ben Ezra Synagogue と Sha'ar Hashamayim Synagogue を訪問した。

⁸ ユダヤ・コミュニティはユダヤ教徒の宗教的、文化的な活動をともにする共同体で、世界各地にある。日本にもユダヤ・コミュニティがある。

⁹ Drop of Milk Egypt جمعية فطرة اللبن

¹⁰ Nicolas (2017) はその時のインタビューに基づく記事。

一方シャアル・ハシャマイム・シナゴークは一般には公開されていないのだが、国内の要人や海外のユダヤ教徒などをもてなすためにしばしば使っている。どちらのシナゴークも現在は礼拝には使っていないが¹¹、きちんとメンテナンスされていてきれいな状態だった。

カイロのユダヤ・コミュニティの運営には、ムスリム、キリスト教徒が関わっていた。彼らの中には親がユダヤ教徒だという人もいるようだ。コミュニティの活動は宗教的というよりは文化的な活動で、カイロにユダヤ教徒が住んでいたという証拠を残すための活動のようだった。

マグダはカイロのユダヤ教徒が自分の代まででいなくなるため、エジプトのユダヤ教の文化財をエジプトの博物館に展示し、誰もが見られるようにしたいと考えている。彼女は実現に向けてエジプト政府の要人との面会を重ねているというが、難航しているようだった。

またマグダはエジプトのユダヤ教徒の墓地を整備し、安全に墓参りできるようにしたいと考えている。彼女によれば墓地が荒らされているし危険なので、ボディーガードなしには身内の墓参りにも行くことができないようだ。墓の近所の人たちに「イスラエル人が墓参りにきた」と思われたら攻撃対象になると恐れていた。マグダは自分たちの活動について話しながら時々涙ぐみことばに詰まった。

マグダによれば文化財の保存や墓地の整備には多くの資金が必要だが、カイロのユダヤ・コミュニティにも、エジプト政府にもその資金はないという。アメリカやヨーロッパに移住したエジプト出身のユダヤ教徒に援助を求めているのだが連絡しても返事がないという。エジプト第二の都市アレクサンドリアには、カイロより多くのユダヤ教徒が住んでいるのだが、彼らと連携するのは難しいようだ。イスラエルや、カイロ出身者以外のユダヤ教徒たちとの連携は考えていないようだ。

ところでマグダはメディアの取材には非常に慣れているようだった。海外の様々なメディアの他、東京新聞の取材を受けたばかりとのことであった¹²。アメリカに住むエジプト出身のユダヤ教徒にエジプトのユダヤ教徒の文化保存の意義を理解し、資金援助をしてもらうために、彼女たちの活動について「もっと英語で書いてもらいたい」と言っていた。

2.3 カイロのヘブライ語話者たち

本節には今回の調査で出会った2人のヘブライ語話者について記しておく。執筆者がヘブライ語話者に聞き取り調査をしたのは、彼らがカイロのユダヤ教徒について何か知っているのではないかと考えたからだ。彼らは2人ともムスリムで、ユダヤ関連の研究をしている研究者である。聞き取り調査はそれぞれ別に行った。いずれの場合もヘブライ語話者ではない現地の別の研究者がひとり同席していた。ヘブライ語話者たちは、イスラエルやヘブライ語について大学で研究しているが、カイロのユダヤ教徒のことは知らないと言った。

執筆者と彼らとの共通言語は英語とヘブライ語だった。執筆者はカイロにおいて、エジプト

¹¹ ユダヤ教の礼拝は男性が十人集まる必要がある。カイロには女性のユダヤ教徒しかおらず礼拝はできない。ラビ（指導者）もいない。

¹² 奥田 (2017)

と関係のよくないイスラエルという国の公用語ヘブライ語を話すのは、執筆者だけではなく協力者にとっても多かれ少なかれ危険だろうと考えていた。ヘブライ語を知らない人も同席していたこともあり、英語を使おうと心がけた。しかしカイロのヘブライ語話者たちは大学の中だけではなく、喫茶店や街中でも執筆者とヘブライ語で話した。会話の途中で執筆者が会話を英語に切り替えても、ヘブライ語話者たちが何度もヘブライ語に切り替えた。

最初のうちは不思議に思ったのだが、次のような理由で実は彼らはヘブライ語を話したかったのではないかと理解した。研究者の彼らは、日常的にヘブライ語で授業をしたり、授業を受けたり、ヘブライ語で文学や新聞を読んだりしているという。英語よりもアラビア語に似ているヘブライ語の方が得意そうであったし、イスラエルの社会や文化について非常に詳しかった。彼らはイスラエルに行ったことがないらしいのだが、知識としてはいろいろ知っていて、実際はどうかと執筆者に聞いてきた。日常的にヘブライ語を使ってはいるものの、授業以外でヘブライ語を話す機会がほとんどなさそうだった。彼らが外国人の執筆者とヘブライ語で話したのは、英語よりも話しやすいし、せつかくの機会であるしという理由だったのかもしれない。彼らの話すヘブライ語は、イスラエルで使われているヘブライ語の口語とはどこかが異なっていた。書きことば的だったのかもしれない。結局何が違うのかはよくわからなかったのだが、口語の違いからも、イスラエルのヘブライ語話者との接点がなさそうだと垣間見られた。

3. イスタンブル

3.1 イスタンブルのユダヤ教徒について

トルコのユダヤ教徒の人口は1万5千人から1万8千人¹³で、そのほとんどがイスタンブルに住んでいるという。トルコのユダヤ教徒の96%がセファルディ系と呼ばれる人々である。主要言語はトルコ語で、執筆者が会ったユダヤ教徒同士はトルコ語で話していた。ただし、後述するようにユダヤ・スペイン語を日常的に話したり、理解したりするユダヤ教徒もいるらしい。またドイツ語や英語、フランス語で教育する私立学校で教育を受けたユダヤ教徒は英語に加えてそれらの言語がとても流暢なようだ。しかしヘブライ語を話せると言う人は少なかった。シナゴグでも、一般の人はラテン文字表記されたヘブライ語の祈祷書を使うことが多いようでヘブライ文字を読む機会は少なそうだった。日常的にシナゴグに通わなければ、ヘブライ語を使う機会もほとんどなさそうだった。例えばある30



図 3 シャローム紙 (2017 Aug 9)
トルコのユダヤ新聞でトルコ語で書かれている。ユダヤ・スペイン語のページが1ページある。

¹³ トルコのユダヤ教徒の人口については、2017年現在、1万7千人 (Ertan 2017) とのことである。1万8千人 (Maltz 2016)、1万5千人 (Bulut 2016) という記述もあった。何れにしてもこれらはおよその人数であって正確な数は把握されていないようである。

代の男性は13歳になる前にヘブライ語を勉強したが今は読めないし話せないという。ユダヤ教では13歳になるとバル・ミツヴァという成人式を行う。その際にヘブライ語を音読しなければならないのでその時は勉強するのだが、それっきり勉強しなくなるので忘れたとのことだった。

ユダヤ・スペイン語については Bunis (1993, 1999, 2016)、オスマン帝国のユダヤ教徒については Rodrigue et al. (1993)、Rodrigue et al. (2000)、Rodrigue (2012)、ユダヤ・スペイン語話者の集団的記憶については Stein (2016) が詳しい。長期的な現地調査に基づいたトルコのユダヤ教徒の状況については、Bali (2013a, 2013b, 2016) などが詳しい。バリ氏は彼自身イスタンブルに住むユダヤ教徒で、図書を出版したり海外の図書館に販売したりするかたわら、トルコのユダヤ教徒の状況について調査し出版している。トルコ語での出版が主だが、一部は英語にも翻訳されている¹⁴。トルコにおけるアシュケナジー系ユダヤ教徒については Schild (2017) が詳しい。シルド氏は自らもトルコ生まれのアシュケナジー系ユダヤ教徒である。バリ氏にもシルド氏にも直接会って話を聞くことできた。現地にいなかったため直接会うことはできなかったが、ウィーン大学の Ioana Nechiti 氏やブレーメン大学の Carolina Spiegel 氏といった外国人研究者もイスタンブルのユダヤ教徒の調査をしている。現地調査の後、イスタンブルのユダヤ教徒からの紹介で、彼女らともメールで連絡が取れるようになった。

3.2 ユダヤ教徒たちが意識するセファルディ系とアシュケナジー系

前述の通りイスタンブルのユダヤ教徒はセファルディ系がほとんどとのことだが、セファルディ系とは一般的にスペインやポルトガル出身の人たちのことを指す。トルコには彼らの他に中欧や東欧出身のアシュケナジー系ユダヤ教徒、ギリシャからきたユダヤ教徒ロマニオットなどがいる。

執筆者が行なった聞き取り調査では、セファルディ系ユダヤ教徒の多くは、自分たちの先祖が15世紀末にスペインから追放されてオスマン帝国にやってきたことを強調していた¹⁵。一方でトルコに住むアシュケナジー系ユダヤ教徒は主に19世紀後半にやってきたという。

ユダヤ教徒たちは自分たちのことをセファルディ系、アシュケナジー系などと認識し区別していることが多いよう¹⁶。執筆者が彼らの話す言語について質問すると、家族の出身地や家庭で話されていた言語について触れながら自分がセファルディ系であるとかアシュケナジー系であるとか



図4 新年を祝うカード
アシュケナジー系ユダヤ教徒が毎年作っている。イディッシュ語（上）とヘブライ語（下）で良い年をと書かれている。内容はトルコ語。

¹⁴ Bali (2013a, 2013b, 2016)など。

¹⁵ 一方でラビの Mendy Chitrik 氏は、2500年前からユダヤ教徒が住んでいたことを強調していた。

¹⁶ セファルディ系、アシュケナジー系以外にもユダヤ教徒の呼称があるのだが、それについては別稿にゆずることとする。ユダヤ教徒の中には両親のどちらかがセファルディ系で、もう一方がアシュケナジー系だという人も多くいる。

説明してくれることが多い。イスタンブルにおける調査では、紹介者が各々の協力者に執筆者が直接会う前に、その協力者がセファルディ系かアシュケナジー系かということを教えてくれた。近年、ユダヤ研究者の間で、セファルディ系だとかアシュケナジー系だとかいうことにはいちいち言及することへの批判がある。「あの人は何系だから」というような偏見や差別も存在する。執筆者もいちいち区別することについての批判には共感しているのだが、本稿では現地の人々がそれを意識している様子をわかりやすく伝えるためこれを記すことにした。

アシュケナジー系のユダヤ教徒は執筆者に「イスタンブルにいるアシュケナジー系ユダヤ教徒は、セファルディ化している」と話していた。イスタンブルではセファルディ系もアシュケナジー系も共通のユダヤ・コミュニティに属している。しかしよくよく話を聞いてみるとアシュケナジー系ユダヤ教徒は独自の活動もしている。アシュケナジー系ユダヤ教徒の事務所やシナゴグを管理している他、コンサートなどの文化行事を開いたり、絵を展示したり、自分たちについての本まとめたり、新年を祝うカードを作ったりしているのだ。イスタンブルのアシュケナジー系シナゴグをタイトルに掲げた本『ユクセッキカルドゥルムに、築百年のシナゴグあり』¹⁷にはイスタンブルのアシュケナジー系ユダヤ教徒の歴史がトルコ語と英語でまとめられている。自分たち独自の歴史や文化を重視していることがわかる。

3.3 イスタンブルでの現地調査

執筆者は1.3節の冒頭で述べた通り、イスタンブルでは12人に直接会って話を聞くことできた。そのうち11人がユダヤ教徒だった。ユダヤ系組織としては、4つのシナゴグ¹⁸、トルコ・ユダヤ博物館¹⁹、トルコのユダヤ・コミュニティ事務所²⁰、トルコ語のユダヤ教徒向け週間新聞『シャローム』²¹の事務所、ユダヤ・スペイン語の月刊新聞『エル・アマネセール』²²の事務所²³、セファルディ系の文化センター²⁴、アシュケナジー系の文化協会²⁵を訪ねた。カイロでは礼拝が行われていなかったが、イスタンブルの複数のシナゴグでは礼拝が行われていた。ただしユダヤ教徒は減少傾向にあり、その影響を受けてかつて行われていた毎日の礼拝が今はなくなったというシナゴグもあった。シナゴグ以外にもユダヤ教徒向けの私立病院や老人ホーム、私立学校、ユダヤ教独自の食餌規定カシュルートに沿った食材を売る食料品店、墓地などがあるのだが今回の調査では訪問できなかった。

¹⁷ Yuksekkaldirim'da Yuz Yillik Bir Sinagog (Frayman et al. 2000)

¹⁸ Neve Shalom Synagogue, The Ashkenazi Synagogue など。

¹⁹ The Quincentennial Foundation Museum of Turkish Jews

²⁰ The Jewish Community of Turkey, Turkey's Chief Rabbinate

²¹ *Shalom* は「平和を」というヘブライ語の挨拶。これはもともとユダヤ・スペイン語の新聞だった。

²² *El Amaneser* はユダヤ・スペイン語で「夜明け」の意味。『シャローム』の文化欄が独立し雑誌になった。

²³ 『シャローム』と『エル・アマネセール』の他に、トルコ語のニュースサイト『アブラレモズ(Avlaremoz.com)』がある。このサイトの創設メンバーのひとりの Betsy Penso 氏によれば、ウェブサイトの名前は、トルコのユダヤ教徒たちがユダヤ・スペイン語で「言わざる」を意味する時に使う “Kayadez” の対義語 “Avlaremoz” にしたという。“Avlaremoz” は「喋ろうよ」を意味するという単語である。

²⁴ Ottoman-Turkish Sephardic Cultural Research Center

²⁵ Galata Ashkenazi Cultural Association

ところで執筆者が調査した8月下旬はちょうどイスタンブルでは夏休みの時期で、多くのユダヤ教徒が、イスタンブル周辺の島で過ごしているとのことだった。イスタンブルのユダヤ教徒によれば、夏休み中はイスタンブルの街中のシナゴグに行く人は減り、島のシナゴグに行く人が増えるらしい。イスタンブル出身の高齢者の中には、島に住居を移した人たちが多くいるという。

執筆者の聞き取り調査に協力してくれたユダヤ教徒たちは、学校教育を英語やドイツ語、フランス語で受けた人たちが多く、いくつかの言語を話すことができた。街中のシナゴグを訪問した時、トルコ語やユダヤ・スペイン語しか話さないユダヤ教徒にも会った。執筆者がこれらの言語を話せないため、彼らとはほとんど何も話せなかった。執筆者は上記の協力者たちから現在のイスタンブルのユダヤ教徒の主要言語はトルコ語で、ユダヤ・スペイン語はとても高齢な人たち以外はもうほとんど話しないと聞いていた。しかし、執筆者がシナゴグで会った人たちについて英語で会話できる協力者たちに「シナゴグで会った人たちに英語が通じなかった。もしも私がトルコ語を話せたら彼らと話せるのに」と思わず呟くと、協力者たちは「いや、ユダヤ・スペイン語だ。あの人たちはユダヤ・スペイン語を話す」、「島に行ったらユダヤ・スペイン語を話す人たちがたくさんいるよ」と言った。現在はだいぶ話者が減っているというユダヤ・スペイン語だが、それを話している人がまだ一定数いるということがわかった。

ところで執筆者の聞き取り調査に協力してくれたユダヤ教徒は、イスタンブルでの生活への愛着を語るが多かった。その一方で、よく外国のパスポートや移住についても話題になった。イスタンブル出身のユダヤ教徒の中には外国に移住した人が多くいるようで、近年はこれまでよりも増加傾向にあるとのことだった。現地のユダヤ教徒によれば、近年は米国やヨーロッパに移住するというのはそこの生活を始めるのが大変な点からあまり現実的ではないらしい。そんな中、具体的な移住先として話題になったのはイスラエルだった。イスタンブルから近く気候も似ているし、移住もしやすい。家族がすでにイスラエルに移住していたという人もいた。ただしイスラエルではイスタンブルにいる時と同じような仕事に就いて高い生活水準を維持するのは難しいようで、積極的に移住したいと考えている人は少なそうだった。

すぐには移住しないものの、ポルトガルのパスポートを取得するための手続きをしているという人たちがいた。トルコ国内で「何か起きたときのための保険として」とのことだった。ユダヤ教徒であればイスラエルのパスポートが取得しやすいのだが、まずはスペインやポルトガルの政府が発行するEUのパスポートの取得を目指すといていた。

移住や外国のパスポートの取得について話題になる中、自分たちには移住は必要ないとか、移住せずにイスタンブルに住み続けたいと話していた人たちもいた。

3.4 イスタンブルのイディッシュ語話者

ところで、執筆者がイディッシュ語を話すということで、現地のアシュケナジー系のユダヤ

²⁶ 執筆者の現地調査時は、スペインよりもポルトガルのパスポートの方が比較的取得しやすいとのことだった。

教徒がイスタンブルにたった一人しかいないというイディッシュ語話者を紹介してくれた。アシケナジー系ユダヤ教徒でハバット・ルバヴィチ派という宗派のラビの Mendy Chitrik 氏（以下、メンディー）である。

メンディーへの聞き取り調査はイディッシュ語で行なった²⁷。メンディーは英語、イディッシュ語、ヘブライ語、スペイン語、ユダヤ・スペイン語、トルコ語を話す。イスタンブルにもともと住んでいたわけではなく、2001年にハバット派から派遣されてやって来たという。メンディーはイスタンブルに来たときはそれほどトルコ語が話せなかったようだ。現地のユダヤ教徒とトーラー（旧約聖書のモーセ五書）を読む勉強会を開いている。勉強会を始めた当時、メンディーと現地のユダヤ教徒との共通言語はユダヤ・スペイン語だったので、ヘブライ文字のユダヤ・スペイン語で書かれたトーラーを読んでいたという。しかしそれから約十年経って、勉強会の参加者たちから「これからは、トルコ語でやってほしい」という申し出があった。メンディーはトルコ語ができるようになっていたので、参加者たちからの希望通り勉強会の言語をトルコ語に変えたという。彼は「現地の人々にとってユダヤ・スペイン語が難しくなったのではないか」と言っていた。執筆者は、ユダヤ・スペイン語を話せる人でも、ヘブライ文字で書かれたユダヤ・スペイン語のトーラーを読むのは大変だったのではないか思った。今回の調査で会ったユダヤ教徒たちがヘブライ文字を読むことにそれほど慣れていなそうだったからだ。

3.5 外国人研究者の存在で再確認する自分たちの言語

イスタンブルのユダヤ教徒の中には、外国人に調査されることで自分たちのユダヤ・スペイン語の知識を再発見する人たちがいるようだ。

「ヨアンナがたくさんの人々にユダヤ・スペイン語でインタビューしている」という話を何人かのユダヤ教徒が執筆者に話してくれた。ヨアンナとは、3.1節で述べた外国人研究者 Ioana Nechiti 氏（以下、ヨアンナ）のことである。彼女はルーマニア出身で、いくつかの言語を話し、ウィーン大学で言語学の研究をしながらユダヤ・スペイン語を教えている。

ヨアンナの調査をきっかけに、自分が意外とユダヤ・スペイン語をよく知っているということに気がつき、とても喜んでいる人が何人かいた。「もともと自分はユダヤ・スペイン語を全然知らないと思っていた。でもヨアンナにユダヤ・スペイン語について色々聞かれたときにちゃんと答えられた。自分は結構知っているって気がついた」と興奮しながら執筆者に話してくれた20代の人があった。また30代の男性は、執筆者の調査をきっかけに自らユダヤ・スペイン語を読み「なんだ、ぼくにも読めるじゃないか!」と言っていた。彼らは家族がユダヤ・スペイン語を話しているのを聞いて育った人たちである。

彼らの中には外国人研究者の調査に協力しようという人たちがいた。ヨアンナの調査がいろいろな意味で良かったのかもしれない。執筆者は今回の調査で、騒がしい場所で昼食をとりながら若いユダヤ教徒に聞き取り調査した。音声がかまく録音できないだろうと思ってICレコー

²⁷ 彼は「イスタンブルでイディッシュ語でこんなに話したのは初めてだ」と言っていた。家族とは英語で話しているようだ。

ダーを使わなかったのだが、途中でその協力者が「ヨアンナは調査をちゃんと録音しているよ」、「インタビューをこれからはちゃんと録音するようにと助言するわ。そうしないと後でわかんなくなるでしょ」と言った。また他の協力者は「ヨアンナはユダヤ・スペイン語ができるから、島で1日3人の人にインタビューしているよ。彼女は継続的に現地を訪問し長期滞在して調査している。君もヨアンナみたいにもっとインタビューしなくちゃ」と助言してくれた。

4. 考察

4.1 イスラーム地域のユダヤ教徒が考える自分たちの故郷

イスラーム地域に住んでいるユダヤ教徒たちの故郷はどこなのだろうか。多くのユダヤ教徒に共通していたのは、自分たちが住んでいる場所への愛着を語ることだった。セファルディ系ユダヤ教徒の多くは自分たちがスペインから追放された人たちの子孫だと言った。これはアシュケナジー系ユダヤ教徒との差異を強調するためなのかもしれない。セファルディ系はスペインが故郷で、アシュケナジー系は中東欧が故郷なのだろうか。それとも彼らがそれよりもずっと昔に住んでいたというイスラエルが故郷なのだろうか。自分はどこで生まれて、今どこにいるのか、自分たちの先祖がどこを経て今に至っているのかが、彼らが自分たちは何者かを語る上でとても重要なようだった。ただ、イスラエルへの郷愁を語るものは少なかった。距離的には近くても精神的には遠い故郷なのかもしれない。

彼らの故郷は将来また増えるかもしれない。彼らの隣人や家族の誰かは米国やイスラエルをはじめとする国々に住んでいる。こ彼らはイスラエル建国や現地の社会情勢の変化などを機に現地のユダヤ教徒が外国に移住し、地元のユダヤ・コミュニティが急激に縮小するという事態を度々経験してきた。現在のエジプトではユダヤ・コミュニティの「最期」がある程度見えている。イスタンブルではいつ社会情勢が急激に変化し、大きな危機が訪れるかわからない。隣人が外国へ移住することが、現地に残る人たちの不安材料になっていた。

こういった不安定な状況に置かれると、自分たちの存在を証明するものやコミュニティの求心力を強化するようなものが必要とするのかもしれない。ユダヤ教徒の文化財や言語の保護や保存といった活動に力を入れ「集団的記憶」を目に見えるものにしようとしているのはそのためではないだろうか。これらの活動は地元のユダヤ教徒同士やその周りの人、海外のユダヤ教徒との人的ネットワークを生み、強化している。活動の中心となっている人々はほとんど「ボランティア」または「趣味」で仕事をしているようだった。これは彼らが強い使命感を抱いて活動に取り組んでおり、それなりに手応えを感じているからだろう。

自分たちの存在や活動について、海外の人々に発信するのを感じている人たちもいるようだった。カイロでもイスタンブルでも近年の情勢不安の中、外国から来るユダヤ教徒の観光客がとても減っているとのことだった。イスタンブルで、あるユダヤ教徒が執筆者に次のように話した。「怖がって外から見ているのと、そこに行ってユダヤ教徒に会ってみるのでは全然違うでしょう。外から見ていたら調査できないかなって思っても、実際現地に行ってみたら大丈

夫だったりする。ここだって来る前に思っていたのと全然違うでしょ？外からはわからないのよ」

4.2 言語学習を参与観察する重要性と可能性

ところで今回の調査では、言語学習の参与観察はできなかった。

これまで執筆者はヴィリニュス大学 (リトアニア) やニューヨーク大学 (米国)、ヘブライ大学 (イスラエル)、テル・アヴィヴ大学 (イスラエル) で開かれたイディッシュ語の語学講座に参加した。もともと執筆者は自分のイディッシュ語を鍛えるために講座に参加したのだが、結果的にそこでユダヤ教徒らがイディッシュ語を学習する姿を継続的に参与観察することができた。イディッシュ語と一緒に学習し、休み時間に一緒に過ごし、個人的に会うようになり、個人宅など私的な場所で彼らが行う言語学習にも参加できるようになった。長時間一緒に過ごし、観察することで、彼らの考え方の傾向や人的つながりについても徐々に知るようになった。執筆者はイディッシュ語を学ぶユダヤ教徒たちが、イディッシュ語話者や自分たちの家族の歴史について語るのを聞いていて、彼らが言語学習を基軸に国家や宗教ではなく言語と文化を主軸にした「集団的記憶」を形成しようとしているのに気がついた²⁸。

イディッシュ語の学習活動を参与観察して博士論文をまとめた執筆者は、イスラーム地域のユダヤ教徒の調査をするにあたって、ユダヤ・アラビア語やユダヤ・スペイン語においても言語学習の参与観察ができるのではないかと考えていた。しかし執筆者が現地に滞在していたときはそういった活動はなさそうだった。

カイロでは、ユダヤ・コミュニティに属する人々がしばしば集まってヘブライ語を学習しているようだが、外部の者は参加できなさそうだった。またイスタンブルでは、ユダヤ・スペイン語に関する文化的なイベントがユダヤ教徒向けにしばしば開催されている。1、2年に一度ユダヤ・スペイン語の集会があるとのことで、あるユダヤ教徒が「次はこれにおいで」と誘ってくれた。これとは別にイスタンブルに住んでいるユダヤ教徒向けにユダヤ・スペイン語を教える計画もあるらしい。また、セファルディ文化センターのコーディネーターをしている Karen Gerson Sarhon 氏は YouTube でユダヤ・スペイン語講座²⁹を配信している。いずれにしても現在のところ対面式の語学講座はないようだ。

今後もしユダヤ教徒たちがユダヤ・スペイン語を学習する様子を参与観察できれば、これまで執筆者が調査してきたイディッシュ語のそれと比較することが可能である。継続的に調査を進めれば、そのような機会が訪れるのではないかと考えている。

5. まとめにかえて

この調査によって、イスラーム地域に住んでいるユダヤ教徒たちが、その場所の歴史やユダヤ教徒の一般的な歴史とは別に、自分たち共同体独自の歴史「集団的記憶」を意識しているこ

²⁸ 鴨志田 (2005, 2014)、Kamoshida (2008)

²⁹ Shalom TV (2017)

とが確認できた。とくにイスタンブルにおいてはユダヤ・スペイン語という言語が、スペインから移住した人たちの集団的記憶の主軸となっているようだった。

カイロとイスタンブルのユダヤ教徒は地域情勢の変化によるユダヤ・コミュニティの縮小をしばしば経験してきた。そんな中そこに残ったユダヤ教徒として一種の責任を感じ、その土地独自の言語や文化を重視する人々がいる。宗教的に厳格な実践をそれほど伴わずとも、言語や文化を主軸にある程度コミュニティが維持されている点や、周囲の異教徒がこの活動に関わっている点が興味深い。移住や他者との接触によって独自性を帯びた彼らの言語や文化それ自体が、集団的記憶として重要な役割を担っていると考えられる。

参考文献

- アントニオ・ルイズ・ティノコ (2014) 「ユダヤ・スペイン語—もう一つのスペイン語」, 上智大学外国語学部イスパニア学科ブログ.
http://dept.sophia.ac.jp/fs/hispanic/teacher/teacher_blog/tinoco05/ (2017/9/20)
- 上田和夫 (1992) 「ユダヤ諸語」 『言語学大辞典』 東京：三省堂書店 (4) 601-614.
- 上田和夫 (1998) 『ユダヤ・スペイン語基礎1500語』 東京：大学書林.
- 奥田哲平 (2017) 「エジプトのユダヤ人 イスラエル建国経て120,000→9人」 『東京新聞』 8月14日夕刊.
- 鴨志田聡子 (2005) 「言語的故地巡礼: 東欧系ユダヤ人とイディッシュ語」 『社会言語学』 (5) 25-33.
- (2014) 『現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動』 東京：三元社.
- Bali, Rifat N. (2013a) *The Silent Minority in Turkey: Turkish Jews*. Istanbul: Libra Kitap.
- Bali, Rifat N. (2013b) *From Anatolia to the New World - Life Stories of the First Turkish Immigrants to America*. Istanbul: Libra Kitap.
- Bali, Rifat N. (2016) *Jewish Journalism and Press in the Ottoman Empire and Turkey*. Istanbul: Libra Kitap.
- Beinin, Joel. (1998) *The Dispersion of Egyptian Jewry: Culture, Politics, and the Formation of a Modern Diaspora*. Berkeley: University of California Press.
- Bulut, Uzey. (2016) Why Turkey's Jewish Population Continues to Decline. October 30.
<https://www.algemeiner.com/2016/10/30/why-turkeys-jewish-population-continues-to-decline/>
 (2017/9/20)
- Bunis M. David (1993) *A Lexicon of the Hebrew and Aramaic Elements in Modern Judezmo*. Jerusalem: Magnes Press.
- (1999) *Judezmo: An Introduction to the Language of the Ottoman Sephardim*. Jerusalem: Magnes Press.

- (2016) Judezmo (Ladino). In Kahn L. et al. (eds.) *Handbook of Jewish Languages*. Leiden: Brill: 365-450.
- Ertan, Nazlan. (2017) For Turkey's youngest Jews, ancestral tongue fading away, *Al-Monitor*. June 28. <http://www.al-monitor.com/pulse/en/originals/2017/06/500-years-old-ladino-fading-away.html> (2017/9/20)
- Frayman, E. & Grosman, M. & Schild, R. (2000) *Yuksekkaldirim'da Yuz Yillik Bir Sinagog: Askenazlar - A Hundred Year Old Synagogue in Yuksekkaldirim: Ashkenazi Jews*. Istanbul: Schneider Tempel.
- Kamoshida, Satoko (2008) A woman and a language: in the case of a Yiddish speaker in Israel, *PaRDeS : Zeitschrift der Vereinigung für Jüdische Studien* e.V. 14: 155-161.
- Kramer, Gudrun (1989) *The Jews in Modern Egypt, 1914-1952*. Seattle: University of Washington Press.
- Maltz, Judy (2016) Why Jews in Terror-stricken Turkey Aren't Fleeing to Israel Yet, *Haaretz*. April 15. <http://www.haaretz.com/israel-news/premium-1.714614> (2017/9/20)
- Nicolas, Pelham. (2017) Muslims in Egypt are trying to preserve its Jewish heritage, *The Economist*. Sep 9. <https://www.economist.com/news/middle-east-and-africa/21728590-egypts-leaders-have-increased-their-outreach-shrinking-jewish> (2017/9/20)
- Orgun, G. & Tinoco, A. R. et al. *Dikcionario de Ladinokomunita* <http://ladinokomunita.tallerdetinoco.org/> (2017/9/20)
- Parisse, Emmanuel (2017) Egypt's last Jews aim to keep heritage alive. *Yahoo News (AFP)*. March 26. <https://www.yahoo.com/news/egypts-last-jews-aim-keep-alive-heritage-031827251.html> (2017/9/20)
- Rodrigue, A. & Stein, S. A. & Jerusalmi, I. (1993) *Images of Sephardi and Eastern Jewries in Transition, 1860-1939: The Teachers of the Alliance Israélite Universelle*. Seattle: University of Washington Press.
- Rodrigue, A. & Benbassa, E. (2000) *Sephardi Jewry: A History of the Judeo-Spanish Community, 14th-20th Centuries*. Berkeley: University of California Press.
- Rodrigue, A. (2012) *A Jewish Voice from Ottoman Salonica: The Ladino Memoir of Sa'adi Besalel a-Levi*, Stanford: Stanford University Press.
- Schild, Robert (2017) Zwischen Österreichischem Tempel und Schneiderschul - eine mühsame Suche nach österreichischen Juden in Istanbul. In Samsinger E. *Österreich in Istanbul II*. Wien: LIT Verlag: 99-131.
- Shalom TV (2017) *Karen Sarhon ile Ladino Dersleri - 1. Ders - El Empesijo (Başlangıç)*. <https://www.youtube.com/watch?v=qHmGyV9cVD0>
- Stein, Sarah Abrevaya (2016) *Extraterritorial Dreams: European Citizenship, Sephardi Jews, and the Ottoman Twentieth Century*. Chicago: University of Chicago Press.

Jewish People in Cairo and Istanbul: Keeping their Networks and Seeking Understanding from Others

Satoko Kamoshida

satoko.kamoshida@gmail.com

Keywords: Jews, Islam, Judeo-Spanish, Ladino, Judezmo, Egypt, Turkey, Sephardi, collective memory

Abstract

In Cairo and Istanbul, there are Jewish people who have passed their religion from mothers to daughters. The author of the paper conducted field research in these cities in August 2017. This paper will briefly describe the cultural activities of Jewish people with their neighbors there. In Cairo, where only six Jews are remaining, the community is formed around them. Ms. Magda Haroun, the leader of the community and the youngest woman of the six, is maintaining the community and trying to preserve the Jewish heritage in Egypt. In Istanbul, 15,000 - 18,000 Jews are living; they still keep their community active and know their own language, Judeo-Spanish. The author of the paper saw that the Jewish people in these cities kept personal networks with Jewish and non-Jewish neighbors.

(かもした・さとこ 東京大学人文社会系研究科大学院 言語学研究室 研究員)

この調査は、日本学術振興会 科研費 若手研究(B)「イスラエルのユダヤ人の言語的多様性：ユダヤに内包されたイスラームの研究」(2016.4-2020.3 代表者: 鴨志田聡子, JSPS KAKENHI Grant Number JP16K16658) によるものである。